義稿

暮雨巷乃大人ゟ昨日須都乃方を志し紀
ゝの乃ゝ乃ゝ乃ゝ逢坂の関守乃人を
乃ゝ志ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝひよなむあらふ乃ゝ乃ゝ
去年の冬ハ五周を倶して若狭乃ふるゝ
出く又平の家よ落葉乃一ハ拾ひ乃ゝて
ゝを乃人ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝて白山通三条乃北よ
ひゝ乃ゝ乃ゝ宗宝とゝ乃ゝ杖をゝ乃ゝ
乃ゝ乃ゝ生咽喉を病る患あれハ人ゝ乃ゝに保養と

江花文庫
早稲田大学文学部図書
60. 6. 21
雲英末雄

を加へさせ給へとなを強よ事なをくれく
就門と扁額をくくトト居乃賀を催を日八十月
ホ七日ヤり多を志ゥありしをを門葉日くよ志ゥ
風流者くよかれなれハ五周も今ハ心易しと
時をを て國よ帰をぬはるを時雨を紀雲ゥる
月乃十日ゆりもをくを喉乃いくをを日須よ
信志く食道をれふをゥをもてゆけを物通すへき
術とかをもるよ露をりれ志をもみを
おふくき ホ二日と乃ふ日

明を澁倉海道といハふハ彼光和尚乃
於抽ヤをを家ひれ志を病を紀し上よ
此海及ふをを て苦痛を紀事十餘日
美とふくうつくしとなく今ハ萬れ細々の
和をかゥ命よ加紀をの少くハを乃
を雲れ涸へるれを
多義をうを紀世乃道ハ弛くよ
と者き中よ笑へを紀ををひくを紀皇
うかをつくハかをうなれハれひを紀

尾張の人くすしやとくに九日臥床ありて
年頃おもはるゝ事もかうせつへうて
良醫を求めて療養うけとるす
しいへども平癒なし胡しあけ文とゝ捨て
ゝかくの如きの元ようぬさに小林良沖
家三世の業とつたへ此門に遊ぶの徒あれ
他に越て肝膽をくだき方術をつくして誠心や
通じん病いかゝ意ふかくみて粥をすゝめ進む
ふよりこの事もなれやうなれと人も家を始て

心落ちゐるなれとなれ共なほ思ふこゝろ
むしろ佛神の擁護をたのむ七日の朝雪の
降るよりはるもんよりやあるむ情なりけるせ
うちつやまく

桂

ふゝハ雪よ部ゝへるかむ川しや
いとゝまよ蛙なくもかく吟ーー出野へる

うつまくまつまの孤の松　芦涯

初夏の脇を附けるハあるかゝ人くもなり
ちひよ句を次てゆくみよ一卷の歌仙なりとゝ

折ふし尾張乃國もち便して

雲よ霞を極て松ふちきりは　士朗

此句を祈禱乃始ゆゑ丹誠を抽て

たゞ一巻乃もんりいを送ふ山川五十里を隔ふ

同輩乃誠信府合して松ふ日よりへ笑ふ

沖力まれよりふしもれとともに北野乃

聖廟よりさゑく枝後を祈て奉ふ此日病顔

漸笑して春ハかゝるに再生乃寿と唱へ

こゝろやもゝれなをあゝ仏と悦あ

あ下ゝに此事故乃人々ゝ告ふ所と以央乃

馬を花ゝくいそく先ゝ十日八ゝ庵ゝ乃完而ゝ

沖ゝと消息あゝと宗匠乃ゝ心ゝ

神ゝたゝや都ハ雪乃三百里　完而

ゝ國乃門人同朋句をゝ集て送ゝ

吟して其信乃あゝを感ゝ人々ゝ

関へて恢へふ顔ゝふ沖けゝ是ゝ氣力

日くゝかゝゝて見へ良安堵乃眉をゝ

ゝとある日嵐月一瓶乃志を携来て謝して

園へ来れやう

弔ふ病を憐みて園中に数枝の花を
採て部屋を飾る新更白いとふる
露ふきて見る人の衣の袖を
胸のあたりさしもすしくれもんぜ
まれハたゞ涙をとゞみもとゞすかつ
てもなの花ふるあり紙和輪川の画図
しきまて病をわすれたる事
先ふ仙ひやうたる咲出れ笑ハ玉ふ簾

も吉れとふれと杜鵑何ワれ影もなく
臘梅なる色よ梅もんハひろ紙
椿よ菊よさハ書秋ふる代をきゝ
ふるかなあるを何く一室をふる丈よ
みふれも花一筒よ四季をこそ
依て獨ぶる

歎延枕上盧生夢　蝶来机辺荘子魂

かるとふやうなる葉もいとうるはしき折ふる坂本の
干當来て月よう画る時ふ代一世ふ賛とも

う後花さそれ孝なを小関紙
そくちにかいつけあくく病中乃年よりくの
句あり杉のく油断あるへうたの越も道よ
ふるく門人乃務と動しもやと今ちら
感してもあるとあり光年よたん一日
二条お公卿御使御役御ふよ病床を下りて
あるる仰ることかしこまり奉り道ゆ禁ふる夏
とあるるかう野ことを多ぬ時れし青陽乃光
きれしつりて一天中をにまれる野乃

朝なを大人試筆をんとあるかひふをして
かくく芦涯ヶ元貴名文書乃裏書をれ
給ふ其墨色帯よかるる以みはたるいを新
をし元人日ハ蕃の令始しふを百池
筆をせる

この宵胡ハ花きハをかるて仏ゆを
民乃蘇ふるやす言ればやあ新を
を法あるもをんく出をしを元
一しかをを元おむ先をれ

皇朝にて有ること多し

玉簾よりさかしらん葬うべ

十二月例の誰れ兼て集て多分時梅とおもて

梅花よ庶の旧こころや為墨

かゝる句を第一にうつる人々の深切なる分抱よ尚て

自あるを自賛して北野の連歌所よ行て

此句をもて法楽の俳諧をんといひてのふあ

たるまこと多くもいとうおもしさはなり十九日ハ

東山南禅庵の文学なれかゝと告てたら

ばんとすぶるもやをも帰足祝と梅をけ渉に

物〳〵ゝと帰足らして出めを松四更の祝よや

あるとも亦の乃戸をまこうして記をく

なる記の僕の赤飯し大人の病発篤なり

いひてくれあるこゝ地をれハ婦君を

こゝ笑良沖芦涯湖美其成笑ると元を

まこく梅をよかみあるこはいふし師の耳近く

こゝく梅時春なりと高都よ告れを屬く

唇こゝ記ふこゝ両眼こゝ涙こゝ落

世をみくしゝ我此世乃若狭のあてゝ分面乃あゝ
はえゝへ数音信乃をさ出れはたゝ分さも悲
しさをいとゝなくたゝ乃む良ゝ腸をや
ふる刻ハ五文乃天たゝあゝれはおく〳〵
相府よりゝへ故郷よりひやをちゝなれの書ゝ
ゝ乃しゝ殯歓世ゝ乃ひゝれハきはゝたゝゝめ
九月四日京極四条の南大雲精舎ゝ葬送乃
式を執りひ七ゝ乃追福かれもゝ終ゝなかなき
かゝゝを移ゝ為ゝ為ゝ日ゝとかゝへ月と隔て
今ハむゝ乃おれとてゝへゝ多載不朽乃恨をきゝ
事ゝハ哀鳴呼吾翁の後ゝ為ゝあゝて其財を
異にして多人を因ゝ寸惜むゝ〳〵多にて
家道極乃ゝ事我ハれハ志ゝ志く庭右乃湯茶
作ゝれハ文ゝゝれゝ作ゝへゝれゝとかゝ数事ゝ志ゝ
ゝひ乃縁紫の同志御ゝ勇ゝゝられおくの門下九人ゝ追
慕作者の仮ゝ空師ゝ紫雪乃大概をゝこゝふゝおくかひ有
寛政四年三月　門人　曲江亭桃臨泥血書

追悼

俳諧之百韻

新あらハ世ハ一脱月　桃睦
たなびくやうなる岩乃雪解　百池
小貝ふき春乃渕清る駒とんて　蘭更
四方乃山掛弦引もひめる　嵐月
長くくと鞍なる色をうちぶし　湖美
ゆ乃ゆ乃なる氣色ましれ　一峯
ふりとうり松原ゆくゆく十町　芦涯
をせ賣ふ乃かやちふ一　其成
鳥乃毛をふ乃ゆくと風乃吹ちら　佳棠
ゆ乃ゆ乃ゆくと夢乃弱来　朱玄
新京ハ新浮船乃ゆく忘　菖巾
氷とあふ新京忘れたくまま　慈周
山かふ乃山乃寺乃帰りくる　五雲
木乃間ゆ乃鐘撞元とゆくれ　雷夫
謡ふくふ乃海味方ト乃ゆ　如瑟

新酒ひらきて汐時をまち　子直
日和うら月れきをよく　紫暁
京とそれまてきねとうの里　東湖
ねりしろやひらくの国落　月峯
さにむ佛乃ちまさなるふれ　蓬洲
ふちりて捨れなるの去る　不木
直宿ねりうらけしけ　土卯
大八巾れうなるに賊を　不朽
ぬまうらう国乃家逗　五周

右一順下略

追悼

亦書をのく略

なくたくむ仲てて庚乃毒　嵐月
ねて茶ふうやせむ去れ宮　湖羹
光よ添る新も七尺れ朧月　朱玄
帰る一人秋まる来めるとあるに　一峯
わけうら紫雲よ隔つ口れふ　其成
鶴乃去もきれ去なる且れ　百池

初七日

あるじの雲月師の病中より
日々めくらめくれ蓮のうち水
祈請の心をこなひしるべ
そなへさ閼伽水を奉るとて

水そそけて香汲へ新みたれ　椒睡
親よかなしき立枯の梅　嵐月
明方の月ふ影や寒むしん　湖美
野道眠くれ昼は一時　芦涯
洲わたる月は名残あるやふ　朱玄

家に後の離れまりあり　其成

右一順下略以下効之

二七日　芦涯

梅の香も高れ新汲茶の上より
雲の色は冴る百も力なき青　椒睡
ほろくと雪さ月新も雲りて　嵐月
月おぼろ流れ淋を口ずさび　湖美
坂の風袖ふるる下　一峯
枕ふるける草の露　貞宋

三七日

凄然として花落さに似たれ　百池

淨法瞳れうけむ月　湖美

大勢乃人を春れ色えて　桃雖

春帆うく帆や船ハ出て行　芦涯

巣れ雀乃春とそうる伸とそ　嵐月

日のあふしけハうふかくや　朱玄

四七日

嵐月

[illegible]四七日春の夕

俳させやう晴て晴て　一峯

たゆう水小浪も閑な寺哀て　湖美

百間をう俵ひきをへ　桃雖

ゆう和月的うふ人乃顔　芦涯

郭ゆ春忘れしう雪　百池

五七日

[illegible]化なう春霞　湖美

うゆくゆ淨へふ　蘆涯

稀おうまうきたや　嵐月

南うげなる家低り多て　一峯
芙蓉ひらくかさりを月れ雲より　玄成
ちれ露をとおちてみら　桃隈

六七日　前書略

紫れ雲なる藤よ蔭ちる那　北越　白眉
こうてちるを春の雲おそう　羅城
此住居性明音よ埋むん　桃睡
風そよくしさりるこの火　青阿
旅こうち馬まれ眠り　一峯

一里一盃乃酒れほう醉　遊明
弟人のなれ風雅よ月取よ　玄兎
うくてなよまくるれ虫　莫成

七々日　詞書略　薩州　完而

物ちってくやき旅れ月日ふ
を庭れこうち春雨乃燈　桃隈
ちたる鶏敲よ遠く雑を写て　青阿
裏よ乃堀の柿ハひけう　立蘇
西風の顔よこはるよ通し　欠風

乾鮭　五百　ちかゝ夕月　土卵

先追れさるハ所乃露拂ふ　芦涯

うき世免てさく秋ハ来るゝ　其成

追悼　をのく詞書略

ちらゝなや解ぬよ結ふ春乃爰　紫曉

毒ちりて白ひをうゝや墳れ茶　桃史

なれはうゝみいくゝく書のゝ　佳棠

神さびを散ゝを白ふ梅乃風　如瑟

俳と芋ふ秋月を杉ゝ乃月　定雅

数梅乃花嗤むあゝの男ひ代　車蓋

梅ちりてなゝゝ角井代ゝの夢　月峯

寿ゝ乗を弱してゝ小ハ敷ゝ乃　宇治　麟路

湯ゝ乗や俳ゝ家ゝ汐ゝ茅ゝ　田原　毛條

先あれきゝゝや秋乃春れ雨　青阿

まゝの風野ゝ俳ゝ乗あゝゝ　士卵

四向せしゝ夏も白雪清ら乃ゝ　日枝　晋鶩

惜むべき花ぞ散ぬる成よう　不朽

立ぬりや終百日乃夏ぞ来ぬ　白黛

寂としてひもすがら新樹陰　馹丹

花辞して若葉ぞかゝる雲ぞ　雷丈

嗅ぬるよ日ぞ杉ぞ山ぞ　眉山

時鳥や蓮催す水一重　城南　下方

吟入を寂しかりけるぞ　貞松

ふる雨にもぬれぬ山ぞ　孟的

家ぬれ君ぞやとゝ花ぞ　大和　可翠

若ぬるやか角ぞ迄ぞ誰ぞ為　兼来

曲江亭乃出音よ師の物故を悲て
然情取あつを文乃返すよ返ら

去ぬ河を見てぬれうつゝ関うつゝ　イヨ　蘭芝

ぬ月ぬなくみゆる世をぬ　イワミ　右稲

抱ぬて見ぬ自然ぬ月ぬ　若州　陶河

うらいたも今ハうゑ者と咲ぬ　百馬
雪絶て春乃ゝうゝせおゝれ　尤橋
世代ハ乃や絶て氷ハ玉の水　巨川
此ゝ水や雲雀なゝれ無ゝき　鬼雀

丹波

なゝれ代ゝ代ゝハゝゝに咲物成　武陵
ゝゝ咲も四十九日乃初さゝゝ　一巣
ゝゝゝわゝ代梅ハ折て書ゝ　翠實
ゝゝゝハ後ゝゝ咲代ゝ　暮蓼

高砂

新たのむゝゝ調て玄を注　布舟
春風ふゝも今ハ松ゝの見ひゝ　負武

北越

花ちゝてゝゝむゝき日和ゝ　桃路
ゝゝ梁乃梅ゝ見ゝゝ書代月　松雨
新玄ゝ水て百れ玄の水　麻栖
ゝの別玄を智ゝゝたゝゝ　宋魚

高岡

新玄向百花胡蝶ゝ伊ゝ　駝上

諧書略

花もまた宮なれ世はあるべし　播州　玉屑
音信を今きくこゝのつれるる　如鏡
雪ハ松神もんよりちるれ涅槃し　花樵
中くよりてかすき初便　梅舎
曉ろ月をやをれよまれ霜　五嶺
仲や月きにちるさう先挿　洗洲
きもろれ俤寒し一峯の松　拾庵
清るなりへよまれ空　五栗

清なくも梅乃をを白ハ見れ江　五艸
世乃名ゆを彩ゆや去乃苔　脱負

かく厚き氷も解てをれる
ろも美ゝ梅ゝ消ゝふる雪の人　江州　柏由
れて行梅にけるき白ひ弓　石蘭
上品乃春ゝ先て行あゝれ　良交
　　可能
　　玄兎

四月廿九日

百箇日　於大雲精舍興行

俳諧之百韻　廣明

新芋ふ芋ふ（乃松よ青わらし）　桃睡
その月うつる露乃夜　芋　不木
賭的乃射わけ一をけもん　百池
いふてこうたれ人をうる事　芦涯
世里八みれ山水よ住なれ　湖羹
ゆ〻しう乃若おれ夕わらわる
わくもなく空り出る日を面白き　嵐月
烏帽子を笠よりかぶりなを　佳棠
あるとも十寸絶の芒塊植て　白眉
匂ひすし紀也さの乃わせ　一峯
とらくと大佛殿れ人乃音　眉山
一日くよ雪ふ世乃中　巫明
永徒ひわふ夜乃遊ひあ〻しく　白黛
百里わあさも嘯よかりる　雷夫
ゆ〻しう月し雲れ流て　定雅

めさ出れそれよ勝てかしを　東湖
酒うけて庁倉よりく大りゝ　月峯
そらふかぬそむ旅れつもく　朱玄
何神ゝ宮も多居も荒果て　驢丹
りてらのすゝも雲れもしきく　笠齋
咲ぬまれ花乃奢を搖ひつも　蘭更
金谷園れそ俗ハきみゝ紀　古塘
澈くゝと水まゝして山らく　春翠
馬命をゝしゝあれそ所　其成

門そに春日詣を觸くゝ　蓬洲
おゝれしつくゝよ新ゝ　土卵
臘八よおゝもも爰ハさめ泥し　青阿
ゝ門くくと男茶ふむ　不朽
志ひ鈴の神よ枝乃ゝ加ゝ　羅城
なそハこけゝゝ紫陽花れそ　士如

右一順下略

我友龍門乃ゝ泥を得てハ雲上ゝ金鱗とかや
ゝ泥中よ潜てハ蜥蜴とひゝそ性を養ふ

ぬれハ元就乃悔もわゝさるをふよいにしてゝ
もゝれわゝいゝふ事歳とかゝ○霊丹寺
しなく書れ雲のもゝ所ゝとゝに世とかくれ
仏ふハ悟もゝゝれゝゝかゝゝわる
なゝひ弱ゝまゝゝれ夏もなゝゝ百ゝ日の忌ゝ
わゝて大雲精舎乃簷端の風ふゝかゝゝ
ゆく庭前乃ゝゝゝよりいわゝゝく

ゝつゝゝゆゝ日やゝゝゝゝ　蘭更

芥子の上

あゝ師学ゝ雨巷ゝ河嘆あ永乃汀ゝ此津ゝ
道遠ゝて石山乃月ゝ長閑なふとわゝんし
三井ゝ秋風ゝ旅寝乃ゝいゝを学んし童夢再
ゝ作ゝゝゝ玉藻説ゝ弟ゝ門人呑須ゝ囲ゝて
師ゝ仰ゝ事ゝゝふ嘆ゝゝゝて平ゝ一咱ゝわゝゝ
勢鞭ゝゝて浮ゝ事有ゝ仰ゝゝゝゝゝ年月
洋海乃郷書ゝ免ゝゝゝの幻住庵ゝ社ゝ話ゝ
席ゝゝまゝけて伏て斧斤ゝゝゝ嘆すゝゝゝに来ゝく
舊箱乃仏燈ゝかゝけ草乃高吟塚ゝ埋ゝ法の一巻

と綴りて志めたるものゝ初て風雅の道にあ
叟なる東武真羽の心ふかく門人卧央の屬
去る三年よりて天明水兎乃三月再い来りて
義仲寺に法席とまりけ三井何素乃傳正を清
法華懺法を修し且幻住庵の俳欧を唱て
蕉翁百回乃遠忌とし上洛乃命教乃かゝるを
志られなるや正月廿日堀膳苑翁の書をあつく
以て世態所叟美容大系社墓を吐し弥生
廿の滅しやうにもあるに忙然として祥中の揖を
くちに閑和る打と考のみよ友にとゝゝに就
門よりはいりは涙乃亡骸をおして傍の踞跪す
柳も有へきことなれとなほ無傷といふ命もかゝも
かゝれ名をとゝ鈴もあるき哭泣の向ふ師弟
盟約の始より世別あんといたりしとも泣涙
砌よ沂に業命も弛ん乃に働吠してすゝ
いを伝ふ

くひ志ゝ遠乃根もあるに
つれ霜　騏道

正月廿六日於幻住菴具行

追悼之俳諧

去れば秋乃蓑も完成一七日　駿遠

あれきなるこれ神よかけらふ　渙更

咲るものわる淮一てきちん　千當

沙風ワる舟乃中みち　親風

南とかりひのかよける月　蘭芦

みやこ人乃妹きの人ち　慈周

蓑合矣剃乃ひ　五英

みきをうすれ小背乃病　百萌

やって剃みちり乃繁を流り　二薑

まこときこ沉乃ふてぼち　馬涯

明神乃ゐ八日れを蜀の中　艸斧

あちこけ賞ていなを植木屋　吳罪

背橋ってもなけちる於をを　藜化

家於れたら薮乃ワて場　子二

ってちよ月八脱れかれめて　吾兮

翌捧ちれ鐘乃とちなち　三黎

故常
菖巾
鯉一
桐吾
元隣
烏孝
二薑
馬湖
芋茅

吳服
慕化
糸二
藜二
故為
桐吾
慈周
經一
菓蕓

[illegible]ぬる花の雫の日ゝてゝき　菖巾
をのゝ露の口ゝ[illegible]　紀風

[illegible]蒼迫当世と辞[illegible]
ちれと香ハ今に[illegible]き梅の[illegible]　五芦

悼

三[illegible]ひゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　菖巾
[illegible]れ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　艸斧
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　呉羅

古[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]ハみゝ[illegible]　馬涯
春風ゝ世[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　樂二
花[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　桐五
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]入[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]霜　干當
月入て[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　百崩
つ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　素考
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　蘇律
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　渙更
月に暴ひゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　蘭蕙

弥よ高く桂も清し水乃上　雄一

香よくやむらぬ梅の梅や今ぬるよ　為国

春を四方よ弼て敷や物乃ふ　信孝

むらぬれ雲の松しなれさるれ学　規風

名ぬと文乃ひしし曉堂先生と弟

ちて松ふるふ乃香ろなつき　二薑

一代乃風流ハ都ハ立れ霞ことれ消て暮雨巷れ

立ぬ名とのと弼名むの園よハ胸ハ作れて心潮乃

交りひとれく是ハ知ることを知ることを乃首

乃秋とれれ　幕下よ乃ろ乃ふ幸あるて物に赤き

みなる春ひ春と左ふうに神をつ行て通れ

物くと起ることを訳乃羽いまと程伴まむふ

わふハ高を高くとてハ湖土れ月よ別を惜をわるハ

さうれふる春を春ひしもを必ハ涙の春よか

白乃春を自ハ誰の嫁との姫ることむかとハ何

れれ朋后れ然と起ぬうこらみふく学人

乃ることわるハふを学先の高よふうひとれてるも

うれしきことなれハ松のひらも床しきものなれハ柳の
ゝもとのうけき物ハ野べの小松も失てこれ物
ハみなこの世をいとをしも中く世ハ
雑波のあれこそねよ病にさへおこされてはりし
ゝ夜をあかす烟の末もあはれなる心遣ひり
起もたゝ袖をあらはに人ゝの歌と
ゝまあつて獨臥をこゝろ
書るふしかけ紙をこゝろ

古烏帽子　月居

一日の陰を文よむの十字路を傍まうと
とゝ何まの時の耳底に聲まを
まん能つ乃こゝ去年をゝ
うゝ市の茅屋の像ふ下居ゝ
まとゝ好ふ色の言道ゝ朝夕と
ゝ山ゝ中ゝ河文のゝ紙ゝ
言ふ言況乃夜白ふ言明
能ゝ世年世ゝ
ゝ言ふ上野

乃光ゆきて三年四月の頃伊勢人を
同道のきゝもとめるてゝ乃人もとゝ
おもてゝ七ゝゝの法乃世乃業法
七ゝ乃他潟乃ゝ毎ゝ変世ゆる玉
手とゝもゝ乃ゝ集を乃ゝ出江手ゆゝ小
ゝゝあてゝ七ゝ一百毎年ゝ七ゝ毎
世ゝ見記乃屋ゝとすゝ手ゝ

後下　玄峯壽

芦渡記

江花文庫